

リンカーンと奴隷解放宣言

三 浦 進

一、はじめに

アメリカ南北戦争 (American Civil War, 1861-1865) 中の一八六三年一月一日、合衆国大統領エイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln, 1809-1865) は、一つの布告を發布した。

ゆえにここに、合衆国大統領エイブラハム・リンカーンは、合衆国の権威と政府に対する現実の武装反乱の時に際して合衆国陸海軍総指揮官として私に与えられる権限により、かつまたその反乱を鎮圧するための適当にして必要な手段として、本日、われらの主の一八六三年一月一日、合衆国に対して現在反逆をなしている人民のいる州と州内の地方とを、次に指定し、命令する。

〔州名および州内の特定地名―略〕

前記の権限により、また前記の目的のために、以上に指定した州および州内の地方において奴隷として所有されているすべての者は、自由であること、また今後、自由になるべき

ことを、私はここに命令し、宣言する。⁽¹⁾……

これが「奴隷解放宣言」(Emancipation Proclamation) とよばれるものの一節である。この布告を発したことにより、南北戦争は奴隷解放のための聖戦とみなされ、リンカーンは「奴隷解放の父」とあがめられるようになった。

しかしながら、引用文からもわかるように、この宣言によって解放されるのは「指定した州および州内の地方において奴隷として所有されているすべての者」であって、合衆国内のすべての奴隷を解放するというのではない。一部の奴隷を解放する宣言であって、しかもそれが出されたのは「反乱を鎮圧するため」の軍事手段としてであった。そのうえ、リンカーンはこの宣言を出すにあたって、あらかじめ一八六二年九月二十二日に、奴隷解放を予告する宣言(「奴隷解放予備宣言」Preliminary Emancipation Proclamation)を出し、その後一〇〇日間、様子を見た上で、最終的宣言であるこの宣言を発するという遅々たる方法をとっ

ている。これらはすべて、リンカーンがもとと奴隷制の即時全面的廃止には反対であって、かれが周囲の圧力に屈してやむをえずこの宣言を發布したことを物語っている。

奴隷解放に対するリンカーンの、このような消極的態度は、なにゆえであったのか。また、それにもかかわらず「奴隷解放宣言」が發布されたのは、なにゆえか。以上を考察するのが、この論文の目的である。

二、奴隷制度に対するリンカーンの立場

リンカーンが大統領になるまでに、奴隷制度に対してどのような考えをもっていたかは、かれみずから執筆した「自叙伝」(Autobiographical Sketch)に明らかである。これは、一八六〇年六月、大統領候補の指名が問題になったころ、選挙用の文書に使う資料として書かれたものであるが、このなかで、リンカーンは次のように言っている。

一八三七年三月三日、この日付の「イリノイ州議会議事録」に、八一七および八一八頁に載った抗議文によって、私はダン・ストウンというもうひとりのサンガモン郡代表とともに、奴隷問題に対する私の立場を簡単に規定した。そしてそれに關するかぎり、私の態度はいまでも変わっていない。抗議文は次のごとくである。

国内奴隷制の問題に關する決議が今会期中に議會兩院を通過したについては、下に署名せる者はここに同決議の可決に對し抗議するものである。

下名は奴隷制度は不正と悪政にねざすことを信ずるが、しかし奴隷廢止論の公布はその害悪を減ずるよりもむしろ増大させるものと信ずる。

下名は合衆國議會は、憲法の下に、各州における奴隷制度に干渉するいかなる権限も持たないことを信ずる。

下名は合衆國議會が憲法の下に、コロンビア地区における奴隷制を廢止する権限をもつことを信ずるが、しかしこの権限はこの地区の人民の要請なくして行使さるべきでないことを信ずる。

これらの意見と前述の決議に含まれた意見との間の相違が、下名をしてこの抗議を發せしめた理由である。

ダン・ストウン

A・リンカーン

一八三七年といえば、熱心な奴隷廢止論者のイライジャ・ラヴジョイ (Elijah Lovejoy) が、イリノイ州で人々の反感を買い、暴徒によつて殺された年である。奴隷廢止論者のはなばなしい活動と、それに対する反感の高まりとを恐れたイリノイ州議會は、奴隷制に対する州議會の態度を明確にする必要を感じ、一つの決議をおこなった。それは、奴隷廢止論者の組織的活動を非難し、南部諸州におけ

る奴隸制を、合衆国憲法によって「神聖なもの」として保証されていると擁護したものであった。⁽³⁾このときまだ二十八歳の少壮議員であったリンカーンは、この決議に賛成投票をせず、ここに掲げた抗議文を提出したのである。

それから二十年以上もたった一八六〇年に、リンカーンは「私の態度はいまでも変わっていない」と言っているが、それは真実である。かれは、奴隸制度は「神聖なもの」ではなく「不正と悪政にねざす」ことを信じており、したがって奴隸制は廃止しなければならないと考えていた。しかし、アボリッショニスト (Abolitionist 奴隸制即時全廃論者) の主張する、奴隸制の即時、全面的、無償の廃止は、憲法に違反すると同時に、奴隸制をめぐる対立を激化させ、連邦を瓦解に導くと考えた。かれは、奴隸制が合衆国憲法によって「神聖なもの」として保証されているとは考えなかったが、「合衆国議会は、憲法の下に、各州における奴隸制度に干渉するいかなる権限も持たない」と信じていた。したがってリンカーンの考える奴隸制廃止の方法は、どの州にも属していないで合衆国議会が「あらゆる事項について立法の専権を有する」^(憲法第一条第八節第十七項) コロンビア行政区 (ワシントン市) の奴隸制を、合衆国政府が民主的な方法でまず廃止し、諸州にこれをみならわせることであった。抗議文を出してから十年後の一八四七年によく連邦下院議員になったリンカーンは、さっそくこの案

の実行にとりかかり、一八四九年に、コロンビア行政区の奴隸制を廃止する法案を起草し、提案した。⁽⁴⁾その内容は、奴隸所有者に政府が金を支払い、奴隸を徐々に解放しようというもので、しかもこの法案は、この地区の白人市民による人民投票で認められなければ効力を発生しないというものであった。⁽⁵⁾この法案は、結局、提案のみにとどまり、葬り去られたけれども、リンカーンはその後もずっとこの案を心に抱きつづけ、後述するように、南北戦争中の一八六二年四月に至って、この案は実現を見るのである。

「奴隸制は不正と悪政にねざし」⁽⁶⁾ているが、現在奴隸制をもっている州 (奴隸州 slave states) の奴隸は、州民の自発的意志による廃止決定がなければ廃止することができない。それゆえ、奴隸制を徐々に廃止していくためには、奴隸州が新たに生まれること、すなわち合衆国の領地に奴隸制が広がることを防止しなければならない。この考えも、リンカーンはかなり早くからもつていたと思われる。かれは一八五五年八月二十四日付の、ジョシュア・スピード (Joshua Speed) にあてた手紙のなかで、連邦下院議員のとき、メキシコ戦争によって新たに併合される領土からは奴隸制度を排除せよというウィルモット (David Wilmot) の提案に「四十度の多きにわたって」賛成投票したことを述べている。⁽⁶⁾しかし、奴隸制の拡大については、少くとも一八五四年にカンザス・ネブラスカ法 (Kansas-Nebraska

Act) が成立し、ミズーリ協定 (Missouri Compromise) が廃棄されるまでは、リンカーンは樂觀的に考えていたようである。事実、そのころ、ロッキー山脈地帯に綿作は不可能と考えられていたし、その西のカリフォルニアは、「一八五〇年の妥協」で自由州になった。一方、ロッキー山脈より東の地域はといえば、ミズーリ協定によって北緯三十六度三〇分以北の地には奴隷制が禁じられており、それ以南には、すでに奴隷州であったテキサス州のほかには、インディアンに保留された土地であるオクラホマ地方が存在するだけで、奴隷州が新たに生まれる余地はなかったのである。したがって、「一八五四年、ミズーリ協定の廃棄は、かつてなかったほど、私を刺激するところとなった」とリンカーン自身が「自叙伝」のなかで述べているのは、ほんとうであろう。かれが、それまでの弁護士業を主とする生活をやめて、ふたたび活発な政治活動をおこなうようになるのはこの年からである。この年、かれはイリノイ州議会下院議員の選挙に立候補し、当選すると、議員になることを辞退した。奴隷制度の拡大に反対する戦いは、一州の議会内ではだめで、合衆国議会で戦わなければならないと考えたのであろう。この年以後、かれはイリノイ州において、民主党の大立者スティーヴン・ダグラス (Stephen Douglas)、カンザス・ネブラスカ法の立案者にほかならぬダグラスに対抗して、連邦議会上院の議席を獲得しよう

と努力した。こうして、かずかずの選挙演説がなされるのであるが、その一つ、一八五八年七月十七日にスプリングフィールドでなされた演説のなかで、リンカーンは次のように言っている。

私は奴隷制度に常に反対してきましたが、現在までのところ、奴隷制度が最後には消滅するという方向に向って進んでいることを希望し、また、そう信じていました。そのため、奴隷制度は私にとって比較的小さな問題でした。私は間違っていたかもしれませんが、しかし、私は世論全体が、すなわち大多数の者が、ミズーリ協定廃棄までは、かく信じて安んじていたものと信じていましたし、現在もそう信じています。しかしこの事件により、私は今までは妄想にとらわれていたのか、あるいは奴隷制度が新しい土台——この制度を恒久的、国家的、普遍的なものたらしめようとする土台——におけるようになったのか、そのどちらかに違いないと信ずるようになりました。その後、に続いて生じた事件により、いよいよこの考えを強くいだくようになりました。このミズーリ協定の廃棄をきたす法律〔カンザス・ネブラスカ法〕は、その目的のための陰謀の端緒をなすものと信じます。このために私は奴隷問題を最大の問題とみるに至ったのであります。⁽⁸⁾

しかし、「奴隷制度に常に反対してきた」リンカーンが「奴隷問題を最大の問題とみるに至った」とき、かれがと

った奴隸制に対する態度は、現存の奴隸制度はそのままにしておき、その拡大のみを断乎として阻止しようとするものであった。その考えは、かずかずの選挙演説にあらわれているが、一八六〇年二月二十七日にニューヨーク市のクーパー・インステイテュートでおこなった演説には、とくに明確にあらわれていた。かれは次のように言った。

われわれは奴隸制度を不正と認めますが、それでも現状のままにしておくことはできません。つまりこの程度のことは、奴隸制度が実際に国家のなかに現存しているというところから当然生じてくる必要からして、やむをえないからです。しかし、われわれの投票の力によって奴隸制度をとどめることができるというのに、これがわが国内の領地地方に広まるままにし、さらに自由州にいるわれわれをも圧倒するままにしておくことができましようか。⁽⁹⁾

この時期においては、奴隸制の拡大防止がかれにとって先決問題であった。奴隸制を「不正と認め」ながらも、それを「現状のままにしておく」ほうが、連邦の分裂をもたらさないし、憲法にも違反しないと、リンカーンは考えたのである。すでに一八五五年に、前述のジョシュア・スピアードあての手紙のなかでリンカーンは、「小生を悲惨な心持にする力を持ち、しかも絶えずこの力を行使する事柄〔奴隸制〕に対して、小生がなんら関心を持たないと臆断

されるのは公平ではありません。大兄はむしろ、北部のいかに多くの人々が、憲法と連邦とに忠誠を維持するために、その感情を十字架につけ犠牲にしているかを、了解されるべきではないかと考えます。小生は奴隸制度の拡張には正に反対します⁽¹⁰⁾。」と言っていたが、「北部のいかに多くの人々」とはリンカーンにはかならなかった。かれは、奴隸の解放について全然考えなかったわけではない。しかし、奴隸を解放するとすれば、それはあくまで、合憲的で、連邦維持の立場に立ち、しかも民主的におこなわれなければならないと考えた。クーパー・インステイテュートの演説からわずか三ヵ月後の一八六〇年六月に、かれが「自叙伝」のなかに、古びたイリノイ州議会議事録の一文をのせたのは、そのためであったと思われる。

三、奴隸解放への第一歩

一八六一年三月四日、リンカーンが大統領に就任したとき、南部の七州はすでに合衆国連邦を離脱し、南部連合を結成しており、戦争の危機が迫っていた。その就任の辞においてもリンカーンは、奴隸制度が布かれている州におけるこの制度に、直接にも間接にも干渉する意図はないし、また、そうする法律上の権限もないと思う、とくりかえし述べていた⁽¹¹⁾。四月十二日に戦争がおこり、合衆国軍隊に動員令を出し、各州に募兵を要請しても、その目的は、反乱

の鎮圧であった。同年七月四日に特別議會に与えた教書、いわゆる「戦争教書」(War Message)にも、奴隷制のことはほとんどふれられておらず、かれはこの戦争を、民主的な、自由な政治が果して維持され存続するかどうかを人類に向って証明する戦い——連邦維持のための戦い——とし、奴隷解放のための戦いとはしなかったのである。

しかしながら、七月二十一日の第一次ブルランの戦い(First Battle of Bull Run)に北軍が敗れ、戦局が思わしくなくなると、黒人奴隷を解放せよとの声が、まず前線の軍司令官の間で高まってきた。かれらは黒人奴隷が南部連合軍の戦力となることを恐れ、これを解放して北軍側で使用するほうが、戦略上有利であると考えた。なかには、前線司令官は軍事上の必要手段としてそれをおこなうことができる⁽¹³⁾と考えて、奴隷解放宣言を発する者もでてきた。こうして、一八六一年八月にはミズーリ州方面司令官のフレモント(John C. Frémont)将軍が、合衆国に反逆⁽¹³⁾している奴隷所有者の奴隷を解放するとの宣言を出し、一八六二年五月にはジョージア・サウスカロライナ・フロリダ方面軍司令官のハンター(David Hunter)将軍が、この方面の奴隷のすべてを解放するとの宣言を出すに至った⁽¹⁴⁾。このような情勢から、陸軍長官のキャメロン(Simon Cameron)も、一八六一年十二月、黒人奴隷を解放してこれを北軍側の兵士とすることをリンカーンに勧告したばかりで

なく、その勧告文を印刷し大都市の郵便局長の間に配布したりした⁽¹⁵⁾。しかし、リンカーンは、前線司令官の宣言をすべて取り消させ、キャメロンを免職して、その職をスタントン(Edwin M. Stanton)に代えたのである⁽¹⁶⁾。

一方、連邦議會においても、時を同じくして、奴隷解放の声が高まってきた。奴隷制即時全廃論者の活動はもとよりであるが、黒人奴隷が南部連合軍に使用されることが北軍に不利である⁽¹⁶⁾と考える者や、さらには、反逆に加担した場合には奴隷を解放するとおびやかすことによって奴隷所有者を南軍に参加させないことが、戦争の終結を早めると考える者がふえてきたからである。かくて議會も、一八六一年八月六日には第一次敵産没収法(First Confiscation Act)を通過させて、奴隷が南部連合の軍隊に使用された場合は、その奴隷を所有者から没収することとした。そして、さらに一八六二年七月十七日には第二次敵産没収法(Second Confiscation Act)を通過させ、反逆をおこなった者の奴隷は自由とされることが、反乱を支持するすべての者の奴隷は永久に自由とされ、ふたたび奴隷にされないことを定めた。しかしリンカーンは、第一次没収法を用い⁽¹⁷⁾なかつたし、第二次没収法については、一時は拒否しようとして拒否教書まで書いたが、議會との衝突を恐れて、不本意ながらも成立させたのである⁽¹⁷⁾。

以上のように、南北戦争がはじまった一八六一年四月か

ら、少くとも一年間は、リンカーンは奴隷解放には決して積極的ではなかったように思われる。その理由として一般に言われるのは境界線諸州が南部連合側につくことをかれが恐れたということである。戦争勃発直後ヴァージニアをはじめとする四州が連邦を離脱して南部連合に加わったあと、奴隷州でありながら合衆国にとどまった四つの境界線諸州——デラウェア、メリーランド、ケンタッキー、ミズーリー——が南部連合側に走るのを恐れたからというのである。しかし、事実はそうではない。通説とは逆に、リンカーンは境界線諸州の奴隷解放には熱心で、これらの諸州に自発的に奴隷制を廃止させようとし、一八六一年十一月に、まず、デラウェア州の奴隷を解放するための案をつくり、その案を同州議会の議員たちに示している⁽¹⁸⁾。次いで一八六二年三月六日には、このことに関して特別教書を議会に送り、次のように勧告した。

上院および下院の同胞諸君。私はここに両院による共同決議の採決を勧告する。決議の要旨は次のごときものである。「決議。合衆国は奴隷制度の漸次的廃止を採用する州と協力し、その州に財政的援助を与え、かかる制度の変革に伴う公私の不便・損害に対し、その各州をして任意に補償せしめるべきことを決議する。」⁽¹⁹⁾

リンカーンの境界線諸州に対する奴隷解放の方法は、か

れが大統領になる以前に考えていた方法となんら変りはなかった。すなわち、(一)奴隷制の廃止は、合衆国政府の手によつてではなく、州の行為としておこなわれなければならない。(二)奴隷の所有者には、州政府によつて補償が与えられねばならない。(三)州政府の財政負担を軽減し、奴隷解放を促進するために、連邦政府は財政援助をおこなうべきである。(四)奴隷の解放は漸次的におこなうべきである、というのである。このうち(二)の補償については、リンカーンは前述の「クーパー・インスティテュートでの演説」(一八六〇年二月)では、奴隷を財産として所有する権利は憲法に明確には確認されていないと言っているが⁽²⁰⁾、しかし黒人奴隷が実際には財産として所持されている実情から、補償なしにこれを奪うことはよくないと考えたのであろう。「公私の不便・損害に対し」としたのは、このような事情からと考えられる。また(四)の「漸次的解放」は、社会的混乱がおこるのを恐れたのと強制的ではなく州民の自発的意志によつておこなわれることを望んだからであらう。この教書のあとのほうで、リンカーンは「私のみるところでは、急激でない、漸次的の解放が、すべてのためにいちばんよいと思われる。…中央政府のほうがするこのような提案は、州地域内の奴隷制度に干渉するための、連邦政府の権利の要求を意味しているのではなくて、事実、個々の場合においてこの問題をいかに処置するかについては、これを直接

利害関係のある州と州民とに全面的に委ねるものなのである⁽²¹⁾」と言っている。

連邦議会はこの勧告にしたがい、この勧告にあるような決議をしたけれども、この提案は境界線諸州の反対にあり、州による奴隸制廃止は実現しなかった⁽²²⁾。しかし、議会はコロンビア行政区の奴隸を解放する法案を四月十一日に、また合衆国領地における奴隸解放の法案を六月十九日に通過させた。リンカーンが十年以上も前に提案したコロンビア行政区の奴隸解放が実現し、しかもそれが有償でなされたことは⁽²³⁾、かれを元気づけたと思われる。リンカーンは七月にふたたび議会で勧告し、「いかなる州も、即時であれ、漸次的であれ、奴隸を合法的に廃止したことを大統領が認めた場合には、解放された奴隸一人について何ドルという額を合算した額に相当する六分利付国債を、その州に支払う」という法案を制定してほしいと要請した⁽²⁴⁾。しかし、そのころ第二次敵産没収法の制定にたずさわっていた議会は、この勧告をとりあげようとはしなかったのである。

リンカーンが反乱諸州の奴隸解放をもふくむ奴隸解放宣言を出すことを決心したのは、このころであった。リンカーンがその決心を最初に打ちあげたのはほかならぬこの私にであると言う人は、かなりいる。陸軍省の電報室に勤務していたエッカート (Thomas T. Eckert) は、それは六

月のことだったと言っており、陸軍長官のスタントンは、それを五月下旬と言い、副大統領のハムリン (Hannibal Hamlin) は六月十八日、海軍長官のウェルズ (Gideon Welles) は七月十三日と言っている⁽²⁵⁾。このほかにもいろいろあり、誰が最初の人か、正確にいつか、真偽のほどはわからないが、とにかくその時期は一八六二年の五月から七月にかけてであったと考えられる。しかし奴隸解放宣言の具体的な内容については誰も知らず、実際にリンカーンが最終的に決心し、全閣僚を集めて、みずから執筆したその草案を示し、助言を求めたのは七月二十二日のことであった。草案は、次のごとくなっていた。

一八六二年七月十七日に可決された「暴動鎮圧、反逆および反乱の処罰、反逆人の財産没収・徴発・その他の目的に関する法律」(「第二次敵産没収法」と称される国会法の第六節にしたがい、また同法と同法を説明する両院合同決議とがともに公布されたことにより、合衆国大統領である私、エイブラハム・リンカーンは、前記第六節に予期されるすべての人々に対し、現存の反乱あるいは合衆国政府に反抗するいかなる反乱にも参加・援助・支持・教唆をおこなわないよう、またこれに違反して没収・徴発をうけないために、第六節に規定されるような合衆国に対する正当な忠誠に復帰するよう、ここに布告し警告する。

また私は、次期議会において、そのとき合衆国の権威を認

め支持している州で、その州内の奴隷制の漸次的廃止を自発的にすでに採用しているか、もしくは今後採用するに至るすべての州に援助を与える実際の施策を採用するよう、ふたたび勧告する意図であるが、この援助を各州が受諾するか拒絶するかは、まったくその自由に委ねるものであることを、ここに告知する。また、上記の目的は、現在停止されあるいは阻害されている中央政府と諸州との間の憲法上の関係を現実に回復し、それを今後維持していくためであること、また、この目的のために戦争は今後も従来のごとく遂行されることを、ここに告知する。さらに、この目的をなしとげるために適切な必要な軍事手段として、合衆国陸海軍の総指揮官である私は、われらの主の一八六三年一月一日に、合衆国の憲法上の権威がこの日に実際に認められておらず、その権威に服さず、その権威を支持していない州内に奴隷として所有されているすべての人々は、その日ただちに、またそれより以後永久に、自由を与えられることを命令し宣言する。⁽²⁶⁾

この草案は、このころのリンカーンの奴隷解放に対する考えをよくあらわしている。まず、第一文節から考えて、リンカーンをして奴隷解放宣言を出そうと最終的に決心させたのは、七月十七日の第二次没収法の成立であり、リンカーンの宣言の目的は、この法律に対する反対の意志表示にあったと考えられる。リンカーンは、このときまでに公私にわたって数多くの人と会談しており、奴隷制に関して

は、その拡大防止はもはや先決問題ではなく、その廃止が問題になっていることを明確に知っていたと思われる。それゆえに、かれは合衆国に忠誠を示した境界線奴隷州の奴隷解放にとりかかっていたのである。一八六二年三月六日に議会に送った勧告のなかで「比較的北方に位置する〔南部中の〕州が、これを開始することにより、さらに一層南方にある州〔南部中の南部〕に対して、いかなることがあってもその企てている南部連合に参加しないということを確実に知らせることができ」とリンカーンは言い、それが境界線奴隷州の奴隷を解放しようとする目的であると言っているのであるから、かれは通説に言うように奴隷解放が境界線諸州を南部連合に走らせるのを恐れたのではない。それとはまったく逆に、いやしくも合衆国内にとどまったからには、反奴隷制の旗色を鮮明にしなければならぬと考えた。かれは南北戦争が、奴隷制の廃止を主張する合衆国と、奴隷制の護持を叫ぶ南部連合との間の戦いになったことを、少くともこの時期までには認識していたのである。しかし、奴隷制の廃止は、合憲的、民主的、平和的になさねばならない、とかれは考えていた。議会の定めた第二次没収法は、この考えとまったく合わないものであった。そこでリンカーンは、これを憲法に違反するとして、あるいは「もっともきびしい正義が最上の策とは必ずしもいえない」として、⁽²⁷⁾これをいったん拒否しようとしたが、議

会との衝突を避けてこれに署名した。こうした法律が成立した以上は、行政部の長として、この法律の実施のためのなんらかの手段を講じなければならない。リンカーンがとった手段は、この不本意な法律が嚴重に実施されるための手段ではなく、この法律を適用されないようにしようという勧告だったのである。

リンカーンが妥当と考えた奴隷解放の方法は、第二文節のはじめのところに掲げられた、合衆国政府の援助による、州の自発的、漸次的、補償つきの解放であり、これが奴隷解放の本筋であることを、かれは一般の人々に知らせたいと考えたのである。しかしその次のところでそのような方法をとるのも連邦の回復あるいは維持のためであり、戦争の目的もそこにあるとしたのは、一般に言われるように、当時、民主党員をはじめとして奴隷解放に反対する声もかなり高かったことを考慮したと思われる。また、実際に、大統領としては、戦争の終結、連邦の回復・維持のほかが、先決問題であったと考えられるのである。

この草案の最後につけたりのように書かれている部分が、いわゆる奴隷解放宣言である。リンカーンはかねてから、州の奴隷制を廃止する権限は大統領にはないと考えていた。しかし、大統領は同時に合衆国陸海軍総指揮官である(憲法第二條第二節第二項)から、戦時には軍司令官として「必要な軍事手段」をとらなければならない。それゆえ、どうしても

も奴隷解放宣言をしなければならぬ立場になったら、この権限によっておこなえば憲法に違反しないと考えたのである。草案のこの部分より前の条項が、いずれも「合衆国大統領である私」によって宣言され告知されているのに対し、この条項は「合衆国陸海軍の総指揮官である私」とわざわざ言い換えているのは、そのためであり、またそのような合憲的手段を考えつくことができたので、かれは奴隷解放宣言をおこなう決心をしたとも思われる。

しかし結局この草案は、その第一文節にあたる部分がこれより二日後の七月二十四日に、「反乱鎮圧法の布告」(Proclamation of the Act to Suppress Insurrection)として発布された⁽³⁰⁾だけで、第二文節の部分、すなわち奴隷解放をうたった部分はこのとき発表されず、二ヵ月後の九月二十二日に、この部分をふくりました内容のものが、「奴隷解放予備宣言」(Preliminary Emancipation Proclamation)として発布されるに至るのである。「予備宣言」の条項は次のごとく⁽³¹⁾なっていた。

アメリカ合衆国大統領、合衆国陸海軍総指揮官、エイブラハム・リンカーンは、ここに左記の事項を布告し宣言する――
「一」戦争は、今後も従来のごとく、合衆国との憲法上の関係が現に停止し阻害され、もしくはその恐れのある諸州に対し、その関係を現実に回復する目的をもって遂行される。

〔二〕次期議会において私は奴隷解放に対する補償金支払の実際の施策を採用するよう、ふたたび勧告する意図である。また、アフリカ人の血統をひく人々の植民を、その同意をえてアメリカ大陸かあるいはその他の場所に、あらかじめ同地の政府の同意をえておこなおうとする努力は、今後も続けられる。

〔三〕一八六三年一月一日に、合衆国に対し反逆の状態にある州あるいは州の指定地域内に奴隷として所有されているすべての人々は、その日ただちに、またそれより以後永久に、自由を与えられる。……

〔四〕行政首長は、前述の一月一日に、当日合衆国に対し反逆の状態にある人民のいる州および州内の地方があるならば、その州および地方を、布告によって指定するであろう。……

〔五〕略

〔以下、省略〕

四、リンカーンと「予備宣言」

リンカーンは一八六二年七月二十二日に奴隷解放宣言をしようと決心しながら、なぜそれを延期して九月二十二日に発布したのか。この点について一般に言われているのは、次のごとくである。すなわち、七月二十二日の閣僚会議で國務長官のシューワード (William H. Seward) が、そのころの戦局は北軍に有利ではなく、今の時期に奴隷解放宣

言をおこなったのでは、疲れ果てた合衆国政府が悲鳴をあげて最後の手段として黒人に援助を求めたように人々に思われるから、北軍がどこかの戦いで勝利をうるまで待ったほうがよい、という意見を述べた。リンカーンはこの意見をいれて、時がくるまで待った。⁽³²⁾ 九月十七日になって、アンティータム (Antietam) における北軍の勝利が報ぜられたので、かれはただちに「予備宣言」の原稿作成に着手し、二十二日に閣僚を召集した。閣僚のあいだには種々の意見があったが、結局、「予備宣言」は、大統領が書いた原稿にほとんど手を加えることなく、即日、発布されたというのである。⁽³³⁾

しかし、この通説は疑問である。なぜなら、七月二十二日の草案も、九月二十二日のそれも、ともに、反乱諸州の奴隷を即日解放するというのではなく、将来、解放することを予告するものであった。そのような予告なら、なにも戦局に左右される必要はないのである。事実、アンティータムの戦いは、北軍の勝利と言えるものではなかった。北軍は南軍とほぼ同数の多くの死傷者を出し、決定的な打撃を南軍に与えることなくこれを後方にのがしたという点で、北軍の勝利は疑問視されたのである。戦局は七月二十二日も九月二十二日も、それほど変わってはいなかった。したがって、宣言の発布を延期した主たる理由は、他にあってと考えねばならない。

その理由としては、リンカーンが奴隷解放宣言はあまり効果がないと考えており、その発布にはもともと乗り気でなかったことが挙げられよう。この点について、リンカーンは、一八六二年六月二十日にクエーカー教団の代表者たちと会見したとき、「もし一片の奴隷解放布告が奴隷制度を廃止できるものなら、ジョン・ブラウンはこの仕事を効果的になしとげていたでしょう。そのような布告は、合衆国憲法以上に拘束力があるとは考えられませんし、また、これをこの国のあの部分〔南部〕に強制することもできません」と語っていた⁽³⁴⁾。また、九月十三日にも、かれは宗教団体の代表者との会見で、「奴隷解放宣言は、ポープ將軍の軍隊が彗星に向って突進することと同様に、効果がないでしょう」と言っているのである⁽³⁵⁾。もともとその効果を疑っていたリンカーンにとっては、シューワード國務長官の延期論は、「渡りに船」であつたと思われる。

それでは、七月にいったん延期した宣言の発布を、九月におこなつたのは、なにゆえであつたのか。これは、戦局がますます悪くなり、大統領に対する批判が高まる一方、奴隷解放宣言を発することにより南部を動揺させると同時に南部より逃亡してくる黒人を北軍の兵力に用いよと唱えるものが多くなつたからである。通説とは逆に、もし北軍が輝かしい勝利をえたのなら、大統領のこれまでにとつた方法に対する批判の声も消え、リンカーンは不本意な奴隷

解放宣言をおこなわなくてすんだかもしれない。かれはそういう意味で勝利を期待したのである。しかし、八月末には第二次ブルランの戦い (Second Battle of Bull Run) で北軍が敗れ、リー (Robert E. Lee) 將軍のひきいる南軍はポトマック川を渡つて、九月七日にはメリーランド州フレデリック (Frederick) を占領するというように、戦局はますます悪化した。そして九月十七日におこなわれたアンティータムの戦いも、前述のように、期待されたほどの勝利ではなかつたのである。ここにリンカーンは、やむをえず、批判をおさえるための最後の「切り札」⁽³⁶⁾として、宣言の発布にふみ切つたと考えてよい。

しかしながら、発布された宣言は、奴隷解放を要求する声にある程度までこたえながらも、かれ本来の奴隷解放についての考えを明らかにするという、巧妙なものであつた。それは、奴隷制の即時全廃をうたつたものではなく、部分的解放であり、解放の予告にすぎないものであつた。「予備宣言」の「三」の条項を逆に解釈すれば、一八六三年一月一日までに反乱諸州が反乱をやめれば、それらの州の奴隷に解放されないものであるから、この条項は奴隷解放を宣言するというよりも、南部諸州に戦争をやめるよう呼びかけたものであつた。さらに、奴隷解放を要求する声の一つのよりどころになつていた黒人の北軍による使用については、なにも書かれておらず、筆者が省略した「予備宣

言」の「五」の条項には、合衆国陸海軍々人に対して、逃亡してきた奴隷は戦争捕虜とすること、これをもとの所有者にひき渡すようなことをしてはならないことが命令されているだけである。そのようなわけで、奴隷制即時全廃論者たちは、その手ぬるさにがっかりし、不満をもらした⁽³⁷⁾。

しかし、かれらは大統領がついに解放宣言の発布にふみ切ったことに対して、歓呼の声をあげたのである。「予備宣言」の発布の二日後にニューヨーク『ヘラルド』紙は、「われわれはこの宣言を……黒人奴隷制に反対する聖戦の布告としてではなく、われらに忠誠な境界奴隷州に対する平和の提供として、また、われらに反逆している諸州に対して、適時に連邦に復帰することによってその地方的制度「奴隷制」を救うための寛大な警告として、受けとる⁽³⁸⁾」と述べたが、「奴隷解放予備宣言」は、まさにそのような性格をもっていたのである。

リンカーンがこのような宣言を出した背景には、北部には、奴隷解放を要求する声が高まった反面に、解放された黒人が大挙して北部におしよせることを恐れてそれに反対する者もかなりあり、かれはそれをじゅうぶんに考慮したからだと思われる。それがとくに配慮されたのが、戦争目的はあくまで連邦の回復であって、奴隷解放のためではないとした「一」の条項と、「また、アフリカ人の血統をひく人々の植民を……おこなおうとする努力は、今後も続け

られる」とした「二」の条項の後半の部分と考えられる。この植民の条項は、七月二十二日の草案にはなく九月二十二日の「予備宣言」においてつけ加えられたものであるが、リンカーンがかねてから考えていたことであった。

リンカーン自身は黒人に対して人種的偏見をいだかず、黒人を白人と同様に待遇したことは、ホワイト・ハウスで黒人の代表者たちとしばしば会談した態度からも明らかである⁽³⁹⁾。また、かれが白人も黒人も基本的人権の点では平等だと考えていたことは、一八五八年七月十七日にスプリングフィールドでおこなった演説のなかに、はっきりとあらわれている。かれは言った。

独立宣言は、すべての人はある点で平等であると宣言しているものと思います。黒人は「生命、自由、および幸福の追求」^(独立宣言文の一節)に対する権利において平等であります。確かに黒人は色においてわれわれと同じではありません——おそらく、その他多くの点で同じではないでしょう。しかし、黒人がおのれの手でえたパンを口にする権利においては、白人たると黒人たるとを問わず、他のすべての者と平等であります⁽⁴⁰⁾。

しかしながら、この同じ演説のあとのほうでリンカーンは、「私のもっとも望んでいることは、白人と黒人との人種の分離であります⁽⁴¹⁾」と言っている。かれは、解放された

黒人が白人の社会に平等な権利をもって受け入れられるとは考えなかった。それどころか、恐れられ、きらわれ、差別をうけ、白人より一段下の地位におかれることは、そのころの北部の社会における黒人に対する白人の待遇を見れば、明らかであった。⁽⁴²⁾したがって、リンカーンは、白人と黒人とは分離するのがもっとも賢明な策であると考え、この方法が合衆国内では不可能だと考えて、黒人の海外への植民を考えたのである。一八六二年四月に「コロンビア行政区奴隸解放法案」によって奴隸が解放されることになること、リンカーンは、解放された黒人をその自由意志に基づいて海外に移住させるという一項をこの法案に入れることを主張し、またその費用の支出を議会に要請し、ともに成功した。⁽⁴³⁾また同年七月の第二次没収法の成立に際しては、これによって解放される黒人の海外植民のため五〇万ドルの支出を議会に要請したが、こんどは成功しなかった。⁽⁴⁴⁾さらに八月には、リンカーンは、黒人指導者の一団と会談して、次のように言い、植民を勧告している。

あなたがたと私たちとは人種が異っています。それが正しいとか悪いとか論議する必要のないことです。この肉体的相違がわれわれ双方に大きな不利益になっています。あなたがたの多くが私たちのあいだに住んでいることによって、あなたたちの人種が非常な苦痛をうけているように、私たちの人種も、あなたがたの存在によって苦痛をうけています。一言

で言えば、われわれの双方が、それぞれ苦しんでいるのです。このことが認められるなら、われわれはなぜ別れないのか、ということになります。⁽⁴⁵⁾

黒人指導者たちは、長年住んできたアメリカから黒人たちを追放しようとするこの白人本位な提案には、もちろん、賛成しようとはしなかった。⁽⁴⁶⁾それにもかかわらず、リンカーンはこのころ、黒人たちをパナマやハイチに移住させることを、黒人植民協会 (American Colonization Society) のメンバーや閣僚たちに、さかんに相談していたのである。⁽⁴⁷⁾黒人を植民させるという条項が九月の「予備宣言」に加えられたのは、以上のような事情からと考えられるのである。

五、「予備宣言」より「奴隸解放宣言」へ

リンカーンは「予備宣言」を出してからちょうど一〇〇日目の一八六三年一月一日に、最終的宣言である「奴隸解放宣言」を發布した。これは「予備宣言」の「四」に「行政首長〔大統領〕は、前述の一月一日に、当日合衆国に対し反逆の状態にある人民のいる州および州内の地方を、布告によって指定するであろう」とあるのをうけて、約束通り、そのような州や特定地方を具体的に指定し、その地域内のすべての奴隸を解放すると宣言したものである。その

ように所定の日時が予告されていたのであるから、リンカーンがこの宣言を發布するにあたっては、なんのためらいもなかったとするのが通説である。

しかしこの通説も疑問である。というのは、この宣言の發布の一ヵ月前になっても、リンカーンは、まだ、できることならこの宣言の發布をせずに済ませたいと考えたふしが見うけられるからである。かれは「予備宣言」を出してからも、州による自発的、漸次的、補償つき、植民奨励をともなう奴隷解放という、かれがもっとも妥当と考える奴隷解放計画を熱心に人々に説いていた。また、一八六二年十二月一日に連邦議会に送った年次教書のなかでも、それを熱心に説き、その実現のために議会が三ヵ条の憲法修正案をつくる決議をすることを要請した。第一は、一九〇〇年までに奴隷制を廃止した州に補償を与えるもの、第二は、戦争中に自由を獲得した奴隷は引続き自由とし、もとの持主で合衆国に対して忠誠である者には補償を与えるもの、第三は、海外に黒人が移住するための予算を連邦議会が計上することを定めたものであった。そしてこの案は、連邦を回復し、「最終的奴隷解放宣言の布告を不必要ならしめる」方法であると、リンカーンは言ったのである。⁽⁴⁸⁾

このようにリンカーンが態度を変えなかったのは、「予備宣言」が、かれの予想したように、南部連合に対してはほとんど効果がなかったからであろう。「予備宣言」の発

表後、南部の諸新聞は、いっせいにリンカーンおよび共和党を攻撃した。奴隷が大挙して逃亡することや奴隷暴動がおこることを恐れて、それに対する警告を発した新聞もいくらかはあったが、実際にはそのようなこともおこらなかった。⁽⁴⁹⁾ また、イギリスが南部連合に対する同情や援助をやることを恐れた新聞もあったが、イギリスの態度も変わらなかった。リンカーンが「予備宣言」を発した二週間後に、イギリスの大蔵大臣グラッドストーンはニューカッスルにおける講演で、南部連合は事実上一つの国家であり「南部連合の北部からの分離に関する限り、われわれはそれが成功すると確実に思っている」と述べ、⁽⁵⁰⁾ またイギリスにおける有力紙ロンドン『タイムズ』は、この宣言は効果がないばかりか「南部をして最後の最後まで戦いを続けさせる」ことになろうと述べた。⁽⁵¹⁾ そのとおりであって、南部連合の戦意は少しも劣えず、連合の威令が及んでいて北軍がまだ無力である地域の奴隷を合衆国大統領が自由であると宣言したところで、どうにもならないことだった。リンカーンは自分がこれまでとってきた方法が、奴隷解放にはいちばん良い方法だという確信をもったようである。前述の年次教書の終りのところで、かれは言った、「他に成功の方法があるかもしれないが、この方法は失敗することはない。この方法は、明確であり、平和的であり、寛大で、かつ正義にかなう——これを選べば、世界は永久に賞賛し、神は

永久に祝福するに相違ない方法である⁽⁵²⁾」と。それは最終的宣言發布の一ヵ月前のことだったのである。

しかし、それならば、その一ヵ月後の所定の日に、なぜ最終的「奴隷解放宣言」を發布したのか。その理由は、この場合も、「予備宣言」發布の場合と同様に、戦局の不利と、それに基く、大統領および共和党に対する批判勢力の台頭とにあることを、筆者はあげたい。一八六二年十二月一日に議会が開かれてからまもなく、十三日には、北軍のバーンサイド (Ambrose Burnside) 将軍がヴァージニア州フレデリックスバーグ (Fredericksburg) で大敗北を喫し、南軍の二倍以上の死傷者を出した。これに続いて月末には西部戦線で、シャーマン (William T. Sherman) 将軍がヴィックスバーグ (Vicksburg) の攻略に失敗し、南軍の四倍にもものぼる死傷者を出した。⁽⁵³⁾ このようなところから議会では、共和党の奴隷制即時全廃論者を中心として、大統領が予定のごとく「奴隷解放宣言」を發布し、ただちに黒人を北軍の兵員として用いよという声が高まった。しかし一方、この年の選挙でいくぶん議席をふやし、勢いをえた民主党は、戦局の不利を大統領の施策の拙劣さに帰し、大統領の政策をさかんに批判し、とくにリンカーンが「予備宣言」を出したことを強く攻撃し、予定の最終的宣言を發布させまいとした。この民主党の勢いに対抗して、共和党員たちは、「予備宣言」に多かれ少なかれ不満

をもつ者をもふくめて、団結して大統領を支持する立場に立ったから、最終的宣言を出したくないと思っているリンカーンにとって、それを出させようとする勢力がかれの政治の味方であり、それを出させまいとする勢力がかれの政敵であるという皮肉な現象が生じた。⁽⁵⁴⁾ こうなってはリンカーンも、予定の日に宣言を發布しないわけにはいかなかったのである。

「奴隷解放宣言」では、連邦にとどまった四つの境界線奴隷州が指定から除外されていたのはもちろんのこと、南部連合内でも、すでに北軍の占領下にあつて反乱がおさまっていたテネシー州全体と、ルイジアナ州の一部、およびヴァージニア州の一部も除外されていた。要するに、この日までに合衆国政府の支配下にあつた地域の奴隷は、州あるいは奴隷所有者による自発的解放がない限り解放されず、その他の地域の奴隷は、合衆国軍がその地域を占領するか、あるいは南部連合が戦いに敗れて屈服するかしない限りは、実際には解放されるはずがないという、まことに奇妙な「解放宣言」であつた。しかし、奇妙とはいえ、それはまことに恐ろしい宣言であつた。連邦の回復も奴隷制の廃止も、もはや血みどろの戦争によってかちとる以外に方法がないことを、それは宣告したものであつた。そしてそれは、決してリンカーンが望んだ道ではなかつたのである。

六、おわりに

「奴隷解放宣言」の発布は、いままでの連邦維持のための戦いという戦争目的に、奴隷解放のための戦いという崇高な目的を加えたところに大きな意義があると言われる。そして、このことが北部の人々の戦意を高め、戦争を勝利に導いたとも言われる。しかし、この説も、批判的に採用しなければならぬ。なぜなら、合衆国政府が戦争目的を変えたことを非難する声も大きかったからである。たとえば、宣言発布の二週間後には、奴隷解放宣言が撤回されない限り、インディアナ州はこれ以上の兵員や金を自発的に合衆国に提供しない、という動議が同州議會で出されている⁽⁵⁵⁾。三週間後にはイリノイ州下院で、「大統領の奴隷解放宣言が撤回されない限り、現在の戦争をこれ以上遂行することは、連邦を回復することにはならず、また合衆国憲法をわれらの父祖がつくったとおりに維持することもできない、とわれわれは信ずることを決議する」という決議がなされている⁽⁵⁶⁾。このように戦争を奴隷解放のための聖戦にすることに反対する声は、解放された黒人たちが北上して自分たちの社会に住むようなことになるのを恐れた中西部の白人のあいだに、とくに大きかった。黒人とともに戦うことをいやがって、戦場を放棄して逃亡する者もあらわれ、また、志願兵はこの宣言発布の影響で増加することも

なく、合衆国政府から割りあてられた数だけの志願兵を集めることができない州もでてきた。こうして、宣言発布の二ヵ月後の一八六三年三月三日には合衆国政府は徴兵法を制定せざるえなくなるのである。

そのようなわけで、宣言が北部の白人たちの戦意を高揚したか否かは疑問である。しかしながら、黒人たちに与えた影響は大きかった。南部連合の威令の及んでいる地域では、黒人たちがすぐにどうするということもできなかったけれども、かれらは北軍の勝利によつて自由が与えられることを知り、ひそかにそれを期待するようになった⁽⁵⁸⁾。しかし、この宣言の影響がたちまちあらわれたのは、皮肉なことに、南部連合支配下の地域ではなくて、この宣言に関係のない北部自由州の黒人たちや、この宣言の適用から除外された境界線奴隷州および合衆国軍占領地域の黒人たちのあいだにおいてであった。自由州の黒人たちは、今や戦いがかれらの同胞を奴隷状態から解放するための戦いになったことを知り、宣言を歓呼⁽⁵⁹⁾の声で迎えるとともに、身を合衆国軍に投ずる者も多くなった。宣言の適用を除外された地域の黒人奴隷にとっては、宣言が適用されるか否かは問題外であった。黒人人口の大多数の住む反乱諸州の奴隷が解放される以上、自分たちも当然解放されるとの信念をかれらはもった⁽⁶⁰⁾。この信念につきあたって、奴隷所有者たちはその奴隷を解放せざるをえなくなり、これらの地域の自

発的奴隸制廃止が、南北戦争の終了前に実現することになるのである。

「奴隸解放宣言」には、「予備宣言」に掲げられたような、戦争の目的は連邦の回復にあり、奴隸解放はそのためにおこなわれるのである、というような語句は存在しなかった。また、漸次的、補償つきの奴隸解放を促進するという条項もなく、黒人の海外植民をおこなうという条項もなかった。そして、かわりに「予備宣言」になかった条項として、解放された黒人で適当な条件を備えている者は合衆国の軍隊に服務することができるといふ条項が、新たに加わっていた。これらの語句や条項が除去されたり付加されたりしたのは、リンカーンが周囲の圧力に屈した結果であると考えことはできても、これをかれのこれまでいってきた奴隸解放についての考えが変つたからだと解釈することはできない。リンカーンの考えは、この宣言の前も後も、少しも変わっていないのである。

リンカーンの考えた奴隸解放は、平和的な方法によるものであって、戦争に訴えたり、戦争を利用して奴隸を解放しようとするものではない。かれが「クーパー・インステイテュートでの演説」(一八六〇年二月)で、ジョン・ブラウンのハーパース・フェリー襲撃の挙を痛烈に非難したのは、⁽⁶¹⁾それゆえであった。リンカーンにとって南北戦争は、連邦の回復が先決問題であり、まず分離した南部諸州を連

邦に復帰させ、しかるのちそれらの州に、かれの妥当と考える漸次的、補償つきの奴隸制廃止をさせよう、というのがかれの考えであった。このことは、一八六三年の終りごろから明らかにされるリンカーンの「再建計画」が南部諸州の早急な復帰をはかったものであることや、かれが第一期任期終了時の一八六五年三月になっても、もとの奴隸所有者への補償を考えていたこと⁽⁶²⁾にも、うかがわれる。また、リンカーンは奴隸制を不正と考えたゆえに、奴隸を解放しようとしたのであって、黒人を戦争に用いるために、これを奴隸状態から解放しようと考えたのではなかった。しかしながら、北部における奴隸解放要求の声は、純粹に人道上の見地からそれを唱えた奴隸即時解放論者を除いては、黒人の戦争への利用を考える人々によって高められ、その人々を政治の味方としたリンカーンは、かれがこれまで拒否し続けてきたところの黒人の兵員化を拒否するわけにはいかなかったのである。こうして解放された黒人の合衆国軍への参加が「奴隸解放宣言」の一条項として加わることになったが、そうなれば、連邦維持のための戦い——国を守るための戦い——に黒人を参加させる以上は、その黒人をもその国から退去させるというのは、まことに不合理なことになる。リンカーンが黒人の植民の条項を除去したのは、その計画が、黒人たちの反対、議会の財政支出拒否、受入れ国との交渉の不調などの理由で、成功しなかったことに

もあるが、同時にこの不合理をリンカーンが感じたからでもあると考えられる。⁽⁶³⁾さらに、戦争に参加する黒人にとつては、それはもはや「主人のための」戦争でもなく、「連邦維持のための」戦争でもなく、みずからを、そして同胞たちを自由にするための戦いである。リンカーンがこの宣言に戦争目的をいれなかったのはおそらくこのことを考えてであったと思われる。⁽⁶⁴⁾

黒人奴隷の解放は、リンカーンが考えていた方法とは、まったく異った方法によっておこなわれた。それは血なまぐさい戦争によって一挙におこなわれた。しかし、そのようにして早急に解放された黒人たちを、白人はどのようにその社会に受けいれるであろうか。このことを考えると、リンカーンは神に祈りたいような気持であったであろう。「奴隷解放宣言」の最後の部分は、次のようなことばで結ばれている。

真に正義の行為と信じられ、憲法により軍事上の必要手段として許されているこの布告に対し、私は人類が思いやりのある判断をくだすことを、また全能の神が恵のうちに嘉し給うことを、切願する。⁽⁶⁵⁾

リンカーンは「奴隷解放宣言」を出しながらも、それが自分の望むところではなかったことを、このことばのなかに物語っていたのである。

註

- (1) John Hope Franklin, *The Emancipation Proclamation* (Anchor Books edition, New York, 1965), pp. 96-97. 引用文中の「」内は筆者。
- (2) 高木八尺・斎藤光沢「リンカーン演説集」、岩波文庫、一八一―一九頁。
- (3) Richard N. Current, *The Lincoln Nobody Knows* (Hill and Wang Paperbacks, New York, 1963), pp. 215-216.
- (4) Louis Filler, *The Crusade Against Slavery* (Harper Torchbook edition, New York, 1963), p. 219; R. N. Current, *op. cit.*, p. 216. カレント教授は法案の提出時期を一八五〇年としているが、リンカーンの連邦下院議員の任期は一八四九年三月までなので、これはおそらく一八四九年の誤りであろう。
- (5) R. N. Current, *op. cit.*, p. 219.
- (6) 高木・斎藤訳、前掲書、三七頁。
- (7) 同、二二頁。
- (8) 同、五七―五八頁。「」内は筆者。
- (9) 同、九〇頁。
- (10) 同、三五頁。「」内は訳者。
- (11) 同、九三頁。
- (12) 同、一二六頁。
- (13) J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 15.
- (14) *Ibid.*, p. 16.

- (15) *Ibid.*, p. 15.
 (16) *Ibid.*, pp. 15-16.
 (17) *Ibid.*, pp. 17-20; R. N. Current, *op. cit.*, p. 221.
 (18) Roy P. Basler (ed.), *Collected Works of Abraham Lincoln* (New Brunswick, 1953), Vol. V, pp. 29-31.
 [以下に Lincoln, *Collected Works* と略記する。]
 (19) 高木・斎藤訳『前掲書』一三三頁。
 (20) 同『八四—八五頁。
 (21) 同『一三三頁。
 (22) James, M. McPherson, *The Negro's Civil War* (New York, 1965), p. 43.
 (23) J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 18.
 (24) *Ibid.*, p. 21.
 (25) *Ibid.*, pp. 33-36.
 (26) *Ibid.*, pp. 36-39; Lincoln, *Collected Works*, Vol. V, pp. 278-279. [] 内は翻字。
 (27) 高木・斎藤訳『前掲書』一三三頁。[] 内は訳者。
 (28) R. N. Current, *op. cit.*, p. 221.
 (29) J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 19.
 (30) *Ibid.*, p. 41.
 (31) *Ibid.*, pp. 46-53. 高木・斎藤訳『前掲書』一三六—一三九頁。
 (32) *Ibid.*, p. 40; R. N. Current, *op. cit.*, p. 224.
 (33) J. H. Franklin, *op. cit.*, pp. 43-45.
 (34) Lincoln, *Collected Works*, Vol. V, pp. 278-279.

- [] 内は翻字
 (35) *Ibid.*, Vol. V, p. 420.
 (36) R. N. Current, *op. cit.*, p. 226.
 (37) J. H. Franklin, *op. cit.*, pp. 55-63.
 (38) New York *Herald*, September 24, 1862, quoted from J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 62. [] 内は翻字。
 (39) R. N. Current, *op. cit.*, pp. 233-236.
 (40) 高木・斎藤訳『前掲書』五九頁。() 内は訳者。
 (41) 同『六〇頁。
 (42) 〆〆〆 Leon F. Litwack, *North of Slavery: The Negro in the Free States* (Chicago, 1961) 巻終り。
 (43) J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 18; J. M. McPherson, *op. cit.*, pp. 89-90.
 (44) J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 31.
 (45) Lincoln, *Collected Works*, Vol. V, p. 371.
 (46) J. M. McPherson, *op. cit.*, pp. 91-95.
 (47) J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 37; J. M. McPherson, *op. cit.*, pp. 95-96.
 (48) Lincoln, *Collected Works*, Vol. V, pp. 518-537.
 (49) J. M. McPherson, *op. cit.*, pp. 55-68.
 (50) London *Times*, October 8, 1862, quoted from J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 67.
 (51) London *Times*, October 6, 1862, quoted from *Ibid.*, p. 69.

- (52) Lincoln, *Collected Works*, Vol. V, p. 537.
- (53) Ralph Newman and E. B. Long, *The Civil War Digest* (New York, 1960), p. 24.
- (54) J. H. Franklin, *op. cit.*, pp. 81-85.
- (55) Wood Gray, *The Hidden Civil War: The Story of the Copperheads* (Compass Books edition, New York, 1964) p. 131.
- (56) *Ibid.*, pp. 131-132.
- (57) *Ibid.*, pp. 132-137.
- (58) J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 121.
- (59) J. M. McPherson, *op. cit.*, pp. 49-50.
- (60) *Ibid.*, p. 51.
- (61) 高木・斎藤訳、前掲書、七八―八二頁。
- (62) J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 147.
- (63) *Ibid.*, p. 132.
- (64) *Ibid.*, p. 142.
- (65) *Ibid.*, p. 93. 高木・斎藤訳、前掲書、一四二頁。なお、この結びの部分は、財務長官のチェイス (Salmon P. Chase) の原稿にリンカーンが手を加えて採用したものである (J. H. Franklin, *op. cit.*, p. 87.) が、リンカーンの気持をよくあらわしていると思う。「奴隷解放宣言」のその他の部分は、形式的な部分を除いては、すべてリンカーンの原稿のままである。(*Ibid.*, pp. 94-97.)